



呉トピックス



2024年産米 検査はじまる

10月中旬、JA呉アグリセンターで2024年産米の検査が始まりました。JAの農産物検査員と営農販売課職員5人が参加し、初日はヒノヒカリやあきさかり、コシヒカリなど308袋（1袋30kg）を検査。11月末まで、うるち米と酒米を数回に分けて検査しました。生産者、品種ごとに仕分けした米袋が並ぶ中、検査員が穀刺で玄米を検査皿に採取。水分量や粒の大きさ、形、熟成具合、高温やカメシの被害粒の混入割合を念入りに検査して等級を格付けしました。検査した同JA営農販売課の甲



▲念入りに検査する検査員

木大輔課長は「昨年につづき、今年も厳しい栽培環境だったが、例年どおりの仕上がりに。組合員が丹精込めた米を適正に検査し、出荷する」と話しました。



倉橋地区ふれあい感謝祭開催 感謝伝える



▲参加者で賑わうガラボンくじ

JA倉橋東支店と倉橋アグリセンターは10月初旬、同センターでふれあい感謝祭を開催し、地域住民約200人が来場しました。地域住民や利用者に感謝を込めて開

催しようと倉橋東支店ふれあい委員会も協力。地域との交流と密着を前面に出した「ふれあい感謝祭」としました。肥料や堆肥、農機具をはじめ、生活日用品、婦人服や営農相談やリフォームなどの相談コーナーを設け、移動購買車やたこやきのキッチンカーも出店。また、購入者向けにガラボンくじを実施。県産米5kgやボックスティッシュなどの賞品に多くの参加者で盛り上がりました。同支店の蒲原直樹支店長は「地域のみなさまに多く参加いただいた。これからも地域に密着した活動をふれあい委員会と一緒に進めていきたい」と話しました。



平年より高糖度 いしじ温州全筆調査



▲果汁を調査する今田所長⑤

JAくれ選果場は11月初旬、呉市倉橋町が発祥の「石地温州」178園地の糖度と酸度を調査しま

した。産地全体の品質向上を図り、有利販売を目指し、分析結果を基に園地ごとに収穫までに必要な作業と、収穫・出荷時期をきめ細かく指導を行います。夏場の干ばつで樹勢衰弱の懸念もありましたが、秋口以降の定期的な降雨と好天に恵まれ樹勢は回復傾向、肥大状況は良好。糖度は平年より高く、酸度は平年並みという結果となりました。調査した同JAくれ柑橘事務所の今田隆司事務所長は「厳しい気象条件に耐え、現在は順調な仕上がりととなっている。収穫まで気の抜けない作業は続くが指導を徹底し、最後まで品質向上に努める」と話しました。



初期消火技術大会出場

JA呉地域は10月中旬、呉市の警固屋公園多目的広場で開催された第35回初期消火技術大会に職員6人が参加し、男子・男女の各部に2人一組で出場しました。呉市消防局が事業所自衛消防隊員の初期消火技術の向上と防火意識の高揚を目的に開催され、今大会は呉市内の事業所から77チームが出場しました。男女の部で初期消火にあたった同JA音戸支店の堀元航太朗さん(23)は「大きな声ではっきりと出火場所を伝え、速やかに行動するなど初期消火の重要性を知った。訓練を重ねて防火意識を高めた」と話しました。



▲消火器で消火するJA職員



落葉果樹

共通事項

▽苗木の植え付け

12月は苗木の植え付け適期です。購入した苗を、切り返さないまま定植している樹が、多く見られます。定植後の苗木の切り返しは将来の主幹の位置と関係します。主幹の枝の分岐部が高すぎると作業効率が低下します。

イチジク

▽密植園の間伐

家庭菜園でも、密植園では作業性が低下するだけでなく病害虫が発生する恐れが高まります。

家庭菜園

12月に植える野菜は、耐寒性のあるもので種類がとも限られませんが、種まきや植え付けできる野菜があります。気温の低い時期に育てるので、害虫の被害や病害の発生も少なく手間を掛けずに育てられるのが特徴です。

まず、野菜を植える土壌の状態を確認し、必要であれば肥料を加えたり土壌改良を行なう必要があります。また、保温対策としてマルチを利用するなど、冬の厳しい環境に耐えうる準備が必要です。

計画を立てよう

耐寒性のある野菜を選ぶことで、低温によるダメージを最小限に抑えることが可能です。

次に、それぞれの野菜の成長サイクルに適した栽培スケジュールを立てることが大切です。また、冷たい風や霜から野菜を守るために、マルチング材の敷き詰めやトンネル栽培などの保温措置を行なうと良いでしょう。

●寒さに強い野菜を選ぶ

寒さに耐性があり、成長過程で低温に強い野菜を選びましょう。

密植状態のままでは作業性を良くしようと強いせん定を実施し、樹が暴れている園地を見かけます。まずは間伐を優先的に行ないましょう。

▽せん定

落葉完了後の12月末～翌年2月までの期間で行ないます。

特に暖冬の場合、せん定時期が早いと切り口から樹液が出る場合があります。そのような場合は、せん定開始を遅らせましょう。

イチジクのせん定は、主枝2～3本の開心自然形が主流です。

樹高は2.5mよりも高くならないように保ちます。基本的に切り返す枝は、外芽のすぐ上で切るようにします。

混みあったところは枝を間引き、30cm以下の短い枝は、成木の場合、一樹あたり10本程度残し、早出し芽(収穫が早い果実が結実する芽)として利用します。

今年植えた苗は、植え付け後に40～50cmで切り返します。

植え付けてから1年経過した樹は、主枝候補として伸ばし誘引した2～3本を基部の分岐点から80～100cm先の外芽の直ぐ先で切り返します。

▽園内の清掃

せん定枝・葉・残果は、病害虫の発生源となりますので、園外に持ち出し処分しましょう。



●寒冷対策

土の中の温度が下がってしまうと、野菜の生育に必要な生物活動が低下し、成長が止まるだけではなく、凍結して根が傷んでしまうこともあります。保温を適切に行なうことで、寒い冬でも健康な野菜を育てることができそうです。保温方法の中でも特に代表的な方法をいくつか紹介します。

①マルチングで土の保温

土の保温には「マルチング」という方法が非常に効果的です。これは、土の表面にわらや落ち葉、または市販のマルチングシートを敷き詰めることで、土の中の熱が逃げにくくなり、保温効果を高める方法です。

マルチングの素材には、有機物を使用することで、分解される際に発生する熱を利用してさらに保温効果を上げたり、土壌の質を改善する副作用もあります。

②トンネル栽培

もう一つの保温方法として知られる

カキ

▽せん定

カキは元々高木性であるので、下から見た状態と脚立に登った状態を参考に、不要な太枝をせん除することから行ない、次の要領で進めていきましょう。

- ① 太い不要な枝を切る。
- ② 主枝・亜主枝の先端を切り返す。
- ③ 上下が重なった枝は、伸びている方向を考慮しながら切る。
- ④ 内向枝(樹の中心部に向かって伸びている枝)は基から切る。
- ⑤ 枯れ枝はすべて除去する。

※可能な限り、脚立を使用しなくてもよい樹高に保ちましょう。

モモ

▽せん定

枝が混みあっていると日陰ができ、芽の発生が極端に少なくなってしまう、実を着ける部位が、枝の先端部分ばかりとなってしまう収穫量も低下します。

樹の内部まで日が入るような整枝、せん定を心がけましょう。

落葉果樹の休眠について

落葉果樹は、秋に落葉してから翌春に発芽するまでの期間が休眠期です。休眠期は生理的に2つの時期に分かれます。

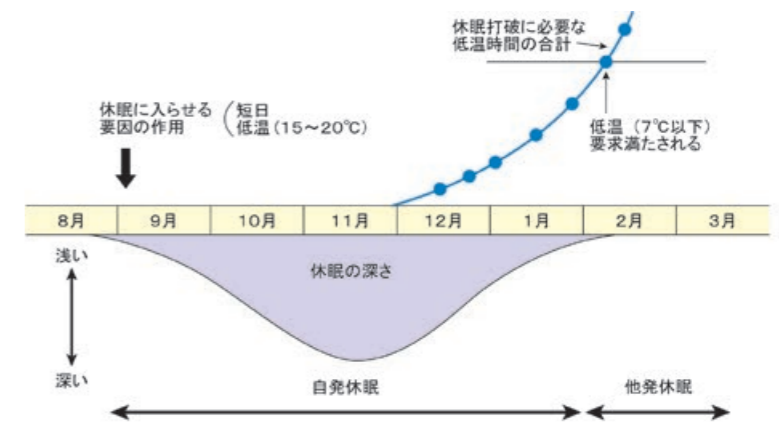


図1 休眠の推移の模式図 (田辺ら)

1つは芽が生理的に眠っている時期で、自発休眠期と言われます。自発休眠に入った後、一定期間の低温に遭うにつれて、次第に休眠から覚めていきます。

落葉果樹の自発休眠明けは、早いものは1月中旬で2月には大部分のものは休眠が終わり、この時期の芽は生理的な眠りからは冷めています。気温が低いために活動できない状態です。この時期が他発休眠と呼ばれています。他発休眠の芽は温度が上がれば直ちに発芽できる状態となります。

与えな過ぎれば凍結によって根が損傷する恐れがあるため、土の乾燥状態を常にチェックし、必要な時に適量を与えるようにしましょう。

水やりは日中の暖かい時間帯に行ない、夜間に水分が残らないように注意してください。また、土壌の種類によって保水力が異なるので、土壌が乾きやすい砂土なのか、水はけの良い腐葉土なのかも考慮する必要があります。

●低温期の肥料管理

低温期でも野菜の成長を助けるためには、適切な肥料管理が欠かせません。冬には生育スピードが鈍るため、肥料の量は普段よりも控えめにしましょう。肥料を与えるタイミングも考慮が必要です。冬の植物は新しい根をあまり張らないため、育ち盛りの秋口に施しておく和良好的でしょう。適切な肥料管理で、寒い冬も元気に育つ野菜を育てましょう。



●冬季の水やりポイント

水の与え過ぎは根腐れの原因になり、

ときめき 女性部通信

地元の伝統織物「紙布」でカバン手作り

JAひろしま女性部呉地区本部中町支部は10月15日、同JA中町支店で部員39人が参加し、紙布（しふ）を使ったカバン作りに挑戦しました。

紙布は紙をよった糸で織りあげる伝統織物。江田島市中町地区で1890年から続く津島織物製造株式会社が作ったもの。部員らは地元の産業を学ぼうとカバンを作る前に工場を訪ね、紙布ができる過程や製品など展示品を見学しました。

あらかじめカバン作りを体験した支部役員が講師を務め、分解した紙袋に色や模様の異なる紙布を貼り付けたものを事前に準備。参加者は筒状になるよう長辺と底を両面テープとボンドで止め、底を厚紙などで補強して完成させました。



地区別研修会 開催

JAひろしま呉地区本部女性部は10月24日、江田島市の鹿川交流センターで地区別研修会を開き、江田島地区の部員52人が参加。また、30日にはJA呉地域の農協会館で行ない、呉地区の部員34人が参加しました。

江田島地区（10月24日 鹿川交流センターにて）

江田島市と広島市で活動するヨガインストラクターで健康体操講師の林田優子さんを招きました。ヨガの呼吸を取り入れ、姿勢を正すことを重点にした「朝起きてできる体操」を学び、足・腰・肩など年齢に合わせた運動でじっくりと身体をほぐしました。



呉地区（10月30日 JA呉地域 農協会館にて）

JA広島総合病院 健康管理課の保健師、長田恵美子さんを講師に招き「健康の源は食事」と題して講演いただきました。前日食べた食事を思い出ししながら、フレイル予防につなげようと1日のタンパク摂取量などをグループワークで学習。乳製品や大豆製品を活用したタンパク質を効率よく摂る方法も学びました。

